

ロラン・バルトのギリシア  
——官能の果実——

滝 沢 明 子

## 序

「ひとりの作家の本質が最初のテキストに見出せるとするのは、一般的にはいささかナイーブな考え方であるとみなされよう」と、ある人物が述べていたのを覚えている。裏を返せば、最初のテキストとは特別な意味をもたされる宿命を帯びているのであり、それはロラン・バルトにおいても例外ではない。最初のテキストに、本当のバルトがみえる。そう断言したい欲求にかられる。というのも、バルトの「最初のテキスト」は二重に存在し、そのどちらもギリシアにかかわるものだからだ。そしてギリシアは、とりわけバルトの思春期、青年期の自己形成において多様な意味で決定的な役割をはたしたからだ。

まず、最初のテキストがひとつではない、という奇妙な状況について説明せねばならない。ひとつめには、実際の最初のテキストがある。「活字になった最初のテキスト」として全集の冒頭におかれている、1942年に書かれた「文化と悲劇」という短いエッセイだ。偉大なる悲劇の世紀とは何かをさぐろうとする文章からは、古代ギリシア悲劇への深い愛着がよみとれる。そしてもうひとつは、文字通り「最初のテキスト」と題され、1974年に『アルク』誌に発表された文章だ。このエッセイでは、1933年、17歳だった夏に書いたというプラトン『クリトン』のパステイーシュ（模倣）を、バルト自身が「私のいちばん最初のテキスト<sup>(1)</sup>」として紹介している。つまり、このように整理することができる。一方に作家・批評家としてのバルトの最初のテキスト、とみなされるエッセイがある。他方では、バルト自身が初めて書いたテキストであるとして後年に紹介した、高校生時代に創作したパロディが存在する、ということだ。なお、バルトの最初の著作は1953年の『零度のエ

クリチュール』であり、これらのテキストは、どちらもそのはるか前に書かれたものである。

さて、ふたつの「最初のテキスト」はいずれも古代ギリシアに関係しているが、その内容はかなり異なっている。前者は演劇をあつかった真面目なテキストであり、1950年代にさかんに取り組み、その後放棄することとなる演劇批評、さらには古代悲劇についての考察につながっている。バルトの演劇論においてギリシア悲劇は重要な位置を占めており、それがバルトの原点のひとつとなっていることは論を俟たない。しかるに後者は『クリトン』のパスティーシュをめぐるエッセイであり、演劇論とは関連がない。むしろ、それを発表した1974年の翌年、1975年に刊行される『ロラン・バルトによるロラン・バルト』の準備段階で派生したテキストだと推測される。すなわち、バルト自身にとって決定的かつパーソナルな過去が語られている自伝的テキストなのだ。そして、本稿で注目したいのは、この後者の系列のテキストである。演劇論とは別に、バルトの個人的な原点として「ギリシア」が存在したとすれば、それはどのような側面においてか。ここから解き明かしてゆこう。

## 1. 西洋古典学

バルトのギリシアへの関心は古くからあり、そして深い。のちに定着した「次々と新しいことをする」という彼のイメージに反して、大学時代に西洋古典学を専攻しているのだ。十代の終わりに結核を患ったバルトは、切望していた高等師範学校への進学を健康上の理由で諦めねばならず、ソルボンヌ大学に登録した。そこで仲間たちと古代演劇グループを結成し、活動に熱中。1936年5月にアイスキュロス『ペルシア人』を上演したというエピソードは、

いくつかのテキストに語られている。そのときバルトはダレイオス役を演じた。

専攻を選んだ経緯については、遺稿の自分史メモには次のように書かれている。

高等師範学校に備える？無理だ。リセに行くために再び早起きをするとはできないだろう。西洋古典学の学士号を取得するために、ソルボンヌに入る。(おそらく、ミスだ。哲学または歴史学を選ぶほうがよかっただろう)<sup>(2)</sup>。

「おそらく、ミスだ」と述べた理由は、続きに書かれている。授業があまりに退屈でほとんど出席せず、図書館で日がな一日おしゃべりに興じたり、お茶をしに行ったりしていたというのだ。つまり、学問分野それ自体に否定的な感情をもったのではなく、単に授業がつまらなかったようだ。少々気の毒である。古代ギリシア世界のありようを、いきいきと現前させるように語る教師に出会っていたならば、バルトが西洋古典学者になる未来もありえたのかもしれない。

専攻として西洋古典学を選択した背景には、すぐあとで詳述する高等中学校時代にめばえたギリシア語とギリシア文化への関心に加えて、結核療養を余儀なくされた時代の読書体験もかかわっていると思われる。高等師範学校に入るという希望を打ち砕かれ、ピレネー山脈の山村での静養中、バルトは失意と孤独のなかでウェルギリウスの詩に熱中したのである<sup>(3)</sup>。自身の生活を「文字通りウェルギリウスのだ」といい、「ウェルギリウスの多くの詩句が当てはまる」と述べている<sup>(4)</sup>。ラテン文学も愛読していたことがわかるエピソード

ドである。

## 2. 「最初のテキスト」

バルトとギリシア文化の出会いをさぐって、リセ・ルイ＝ル＝グラン時代にさかのぼってみる。その当時の思い出が語られているのが、1974年の「最初のテキスト」である。17歳のときに自作したという『クリトン』のパロディを紹介する前に、バルトは述懐する。リセ・ルイ＝ル＝グランの生徒だった1933年、「一年中、来る週も来る週も、私たちは『クリトン』の解釈をしていた<sup>(5)</sup>」と。その夏、バルトは祖父母の家で批評家ジュール・ルメートルの本を読み、そのなかに「作者のパスティーシュをおこないつつ、偉大な古典作品の結末を修正する<sup>(6)</sup>」という着想を見出す。ちょうどその頃、級友たちと雑誌を創刊することになり（ただし、刊行されることはなかった）、それが着想を実行に移すきっかけとなった。バルトは、「プラトンのパスティーシュをおこなうジュール・ルメートルのパスティーシュ<sup>(7)</sup>」、という方法で「最初のテキスト」を執筆した。テキストは、『『クリトン』の余白に』と題された。プラトン作『クリトン』では、クリトンが死刑を待つソクラテスを獄舎に訪ね、逃亡するようにと説得を試みるものの、ソクラテスはそれを断固として退ける。ところがバルトが書き換えた結末では、ソクラテスは多くの弟子たちの説得に屈服し、逃亡を受けいれて海に漕ぎだす。その物語は、ソクラテスが弟子たち、そして乳母とともに船に揺られている場面で終わる。

さて、このパスティーシュにおいて非常に印象的、かつ象徴的な役割を果たすものが、「イチジク」である。ここからは、「イチジク」に注目しながら

『クリトン』の余白に」がどのように展開するかをみてみよう。

冒頭、説得に失敗したクリトンが立ち去った直後、ソクラテスは自分の対応が正しかったのかどうか自問自答している。そこに、守衛によってこの果実が運ばれてくる。

そのとき守衛ルシテスが、コリントスのイチジクが載った皿を運んできた。果実の熟してふくれあがった脇腹に、つややかなばら色のしずくがまだ滴っていた。金色でところどころひび割れた皮から、白い果肉層のうえに並んでいる赤い種がのぞいていた。陶土でできた皿から、糖の熱い匂いがたちのぼっていた。ソクラテスは手を伸ばしたが、思い直して、「何になるというのか。私には消化するだけの時間もないだろう」と呟いた。再び、胸が締めつけられる思いだった。

それなのにエウマイオスは、こそこそとイチジクを食べていた<sup>(8)</sup>。

一読してわかるように、ここでイチジクには露骨にエロティックなイメージが付与されている。そして、ソクラテスがイチジクを食べるかどうか、生きるか死ぬか、逃亡を受けられるかがかかっている。このテキストのサスペンスは、ソクラテスがイチジクの誘惑に屈するか否か、なのだ。そしてそれは、ソクラテスが官能的悦楽の誘惑に屈するか否か、という意味をも含んでいる。

冒頭ではイチジクを食べることを思いとどまったソクラテスであったものの、すぐに二度目の欲望がおとずれる。「美しいアルキビアデス」がやってきて、旅した先に待っているであろう幸福な生活を語って聞かせたのである。

アルキピアデスは、アナクナオス山の斜面に建つ、一軒のつつましやかな家を知っていたのだ。その扉の前にはイチジクの木と大理石のベンチ、そしてテラスがあった。そこからは、遠方にナフプリオとアシネの家々を、彼方には海を一望できる。彼らはみなそこで幸福に、思慮深く暮らすだろう。いくつかのオリーブとイチジク、いくらかの山羊の乳があれば満足だ。ソクラテスは彼らに教えを授け続けるだろう。夕暮れには、沈む太陽のもと、魂について語るだろう。目の前の海からは、平原のオリーブの木々を越えて、愛のこもった挨拶のように、塩気をふくんだ涼風が送られてくる<sup>(9)</sup>。

このアルキピアデスの言葉は絶大な効果を発揮し、居合わせた者みな感動をおぼえる。ソクラテスまでも「胸がいっぱい」になってしまうのである。ソクラテスは自分が心を動かされたことに困惑し、しかしアルキピアデスの「残酷な誘惑」に抗いがたいものを感じる。彼は自身のうちに「得体の知れぬ葛藤」を認め、それが「精神にはなんら関係がなく、むしろ身体にかかわるもの<sup>(10)</sup>」だと考える。さらには、その魅惑があまりにも強力であるため、「精神のもっとも巧みな攻撃に耐えぬいたのち、肉体に降伏しようとしているのだろうか、と苦痛とともに自問<sup>(11)</sup>」するに至る。その予感の的中するものであり、続く一押しでソクラテスはあっけなく陥落する。

そのとき、ルキテスがイチジクの皿をもってきた。ソクラテスは衝撃を受け、考えるのをやめて皿をじっと見つめた。エウマイオスから伝え聞いていたので、イチジクがソクラテスの徳にたいするとどめの一撃をなすのだと誰もがわかっていた。ゆえに、みなが注視していた。もしソク

ラテスがイチジクを食べたのなら、それは彼がみな懇願に負けたことを意味する。ソクラテスもまた、それを理解していた。「ソクラテス、我々は君を変えようとは思っていない」と、クリトンは言った。けれどもティレシアースは、ゆっくりと窓を薄開きにした。太陽が差しこみ、その光がイチジクを優しく包んだ。金色に照らされたその脇腹には黒ずんだくぼみがあって、そこから生ぬるい甘さが流れて感覚を酔わせた。ソクラテスは目を閉じた。ティリンスにある、イチジクの木とベンチ、そしてテラスのついた小さな家を思い浮かべるためだった。自由の生き生きとした象徴の海風、その塩気がまざったイチジクの味を感じた気がした。

そして、ごくあっさりと手を伸ばし、彼はイチジクを食べた<sup>(12)</sup>。

説得は成功し、ここでいったんストーリーは完結する。あとはエピローグのように船上のソクラテスの様子が付け加えられる。自由になったソクラテスは、身体の欲望に身を委ね、もはや精神活動には関心をしめさない。修辞についての弟子の問いにも、「それはプラトンがやってくれるだろう！」と言い放つ。そして、乳母エウリュメドゥサが「コリントスのイチジクとクレタのワインの瓶」をもってやってくる方にソクラテスが向きなおるところで、テクストは終わっている。

同年輩の盟友クリトンによる、精神に語りかける説得は功を奏さないのだが、美貌で知られるアルキピアデスによる誘惑は身体に作用し、ソクラテスはいとも簡単に屈してしまう。ソクラテスに決定的な影響を与えたのがアルキピアデスであるという点は重要である。プラトン『饗宴』には、アルキピアデスはソクラテスが自分を愛することを望み、誘惑を試みていたことが語



られているからだ。ソクラテスはそれを受け入れはしない。要するに、バルトによるこのパステイッシュ作品は、「もしソクラテスがアルキピアデスの魅力に屈したら」という着想を、『クリトン』の結末の書き換えという形をとって実現させたものだといえる。史実では、ソクラテスの裁判時にアルキピアデスはすでにこの世にない。ゆえに、この書き換えはまったくのファンタジーである。バルトはもちろん『饗宴』を読んでいたであろうし、またアルキピアデスがソクラテスと結ぶことを欲した古代ギリシア式の男性間の愛の関係についても知識を得ていたにちがいない。このパロディにおいてイチジクは、美貌の青年の肉体的魅力を象徴していると考えてよいだろう。

### 3. イチジク

なぜ、イチジクだったのか。17歳のバルトは、その果実にどのような意味を込めたのか。1974年、58歳のバルトは、自身の「最初のテキスト」が書かれた背景事情をあれこれ解説したのち、次のように付け加えている。

イチジクのことに残っている。バイヨンヌ<sup>(13)</sup>の家の庭にはイチジクが生っていたのだが、小さくて紫色で、きちんと熟することが決していないか、あるいはいつも熟しすぎていた。あるときはその乳白色の果汁が、ある時はその腐敗が嫌で、私はその果物が好きではなかった。(中略)では、何が私をしてそれを誘惑の果実、不道德の果実、哲学的果実にさせたのだろうか？ おそらくただ単に、文学である。イチジクは文学的、聖書的、そしてアルカディア的な果物である。イチジクの背後に、「セックス」、「女性器<sup>(14)</sup>」が隠れている場合は別だろうか<sup>(15)</sup>？

イチジクは多くの文化圏においてしばしば多産豊穡の象徴とされ、そこから性的なイメージが付与されることが少なくない。女性器を暗示する例がよくあるわけだが、実はとりわけギリシアでは、形状からの連想で睾丸を意味する場合もあるらしい。さらには、イチジクはディオニュソスとも深い関連があり、ディオニーシア祭ではイチジクの木から神像が作られている。イチジクは古代からギリシアと縁の深い果物なのだ。一般にもたれがちな生殖や女性器のあけすけなイメージとは別に、バルトはイチジクの実を文学的なコンテクストにおき、甘く官能的な知の果実というイメージを与えようとしている。

さて、「最初のテキスト」の解説部分をもう少し分析してみたい。パスティーシュを執筆した背景を説明するために、バルトは学校でのラテン語、ギリシア語の授業を回想する。それは「高貴なクラス」だったと述べたあとで、バルトは次のように語る。

ギリシア文化について、結局のところ教室では何も語られず、いかなる欲望も喚起されることはなかった。ギリシアは性のあり方でもありうる、ということは、教室を出て、別の場所で（少しのニーチェ、少しの彫像、ナフプリオやエギナ島の何枚かの写真を通して）察する必要があった<sup>(16)</sup>。

性のあり方 (sexualité) とは、バルトにとっては明白に男性の同性愛を意味するだろう。ティファース・サモワイヨの評伝から、バルトに「察する」きっかけを与えた本の具体的な情報を知ることができる。サモワイヨによると、「初めてのセクシュアルな感情」は、リセ・ルイ＝ル・グランに入学する前に通っていたリセ・モンテーニュ時代に、二冊の本によって喚起されたの

だという。『ギリシアにて』と題されたアントワヌ・ボンによる写真集と、スイスの著述家ギイ・ド・ブルタレスによる『イタリアでのニーチェ』であった。それらはバルトにたいして、「教室の外に学ぶべきことがあり、文学は直接的に生きられうる<sup>(17)</sup>」のだと、漠然と示唆したという。ギリシアの文学を直接的に生きるとは、バルトにとって男性との官能の関係を生きることになるだろう。すなわち、少年時代の性の目覚めは、ギリシアを通して行われたのである。

性のあり方の自覚におけるニーチェの役割は、それほどはっきりとはしていない。しかしながら、少なくともニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』の「至福の鳥々で」という章に、イチジクをめぐる印象的な場面がある。該当部分を引用しよう。

いちじくの実が木から落ちる。甘い豊かな実だ。落ちながら、その赤い皮は裂ける。わたしは熟れたいちじくの実を落とす爽かな北風だ。

いちじくの実のように、友よ、これらの教えもあなたがたのもとに落ちる。さあ、その果汁と甘い肉をすするがいい！あたりは秋、澄んだ空、昼さがり。

見るがいい！わたしたちをとりまく何という充実のけはい！そしてこの溢れるような豊かさのなかにあって、はるかにひろがる海を眺める感動<sup>(18)</sup>。

この一節は、もちろん古代の哲学者とは微塵も関係がない。しかし、『クリトン』の余白に」とどこか通ずる雰囲気をつたえている。イチジクの甘く官能的なイメージ、そして、友とともに「はるかな海を眺める」という様子。

イチジクがすぐれて文学的な果実であることがよくわかる。そして、17歳のバルトが描きだしたソクラテスの姿がこの情景に重なる。ただしここでは、イチジクは授けられる「教え」に喩えられていて、賢者の側にある。バルトはこれを逆転させ、「教え」を授けられる側にあるアルキビアデスに、イチジクの性質を付与した。誘惑に屈するソクラテス、という発想の源の一端には、ニーチェのこの一節があったという推測は、あながち見当はずれではないだろう。

#### 4. 「ギリシアにて」

さて、活字になった最初のテキスト、すなわち「文化と悲劇」から2年ののち、1944年にバルトは「ギリシアにて」というテキストを発表している。これは、ソルボンヌの古代演劇グループの仲間たちとの旅の思い出を綴った断章形式のエッセイである。旅行じたいは『ペルシャ人』の上演の2年後、1938年に実施されたもので、これがバルトにとって初めてのギリシア探訪であった。憧れの国への、念願の旅であった。前述したようにバルトはリセ・モンテーニュ時代に出会った写真集に深い感銘を受けており、撮影された風景を通してギリシアという国そのものに魅了されていた。過去に夢中になった写真集のタイトルと、この旅行記テキストが同じタイトルであるというのは、偶然ではないだろう。バルトは断章を連ねる形式で、切り取ったそれぞれの瞬間を描写している。それはまるでテキストによって写真集を再現しているかのようだ。

このテキストの端々から、バルトがギリシアに抱き、そして現地に見出した官能、幸福、甘美な陶酔のイメージが伝わってくる。アテネの港の近くの

情景は、以下のように語られる。

空、静かにうちよせる波、この大地。ここで、これまでまったき天上のものに思われていた場所を踏みしめている。音楽と人々の顔が横切ってゆく夏の夜はエキゾチックな香りを放ち、すべてが興奮をもたらし、すべてがアヴァンチュールの情景をかたちづくる<sup>(19)</sup>。

直接に性的なエピソードが語られることはまったくないのだが、ソクラテスのイチジクのように、バルトは身体感覚をとおしてギリシアを味わう。コーヒーを飲んだあとに口を濯ぐさいの水のつめたさは「快樂」と表現される。ワインを薄めて飲む習慣については、「酩酊、エクスタシー、情熱を手放して、より軽やかに高揚するため<sup>(20)</sup>」であり、「ほとんど神聖ともいうべき甘美なる特異性の状態にみちびく技術<sup>(21)</sup>」であると述べる。バルトにとってギリシアは、身体感覚を研ぎ澄ませて、快樂を味わい尽くす解放の場所なのである。

そして、残念ながらイチジクではないのだが、この旅行記にもまた印象的なかたちで果実が登場する。まずひとつめは、出会った少年が差し出すブドウである。

美少年といえば、私たちは16歳の羊飼いにしか出会えなかった。ブロンドの髪、青い眼をもち、整った横顔で、優美な雰囲気体が体全体に漂っていた。彼はカルミデス、リュシス、クレイニウスであり、あるいはアウトリュコスだった。エギナで、彼は家畜の番をしていた。微笑んで、彼は私たちに丸々としたブドウの房を差しだした。周囲のいたると

ころで、大気は太陽にみちていて、みずみずしいまでに冷たい露が茶色の大地の上で光っていた<sup>(22)</sup>。

現地の美少年に、バルトはソクラテスの弟子の姿をみる。最初に挙げられている3人はみなソクラテスに教えをうけた少年たちであり、とりわけカルミデスとリュシスはその美しさで知られている。アウトリュコスギリシアの神話の人物で、家畜を盗むというエピソードがあることから羊飼いの少年に重ねられ、連想されていると思われる。ブドウを差し出すギリシアの美少年の姿は、17歳のときに書いた『クリトン』のパロディを思い出させずにはいなかったのだろう。バルトはソクラテスの弟子が具現化した姿をみたのだ。このエピソードは、自身が描いたソクラテスのように、バルトがそのブドウ＝美少年に抗いがたい誘惑をおぼえたことを示唆している。

果実が描写されるもうひとつの場面は、「ミケーネ、アルゴス、ティリンス」と題された短い章にある。おそらく遺跡を訪ねたときだろうか、廃墟とその通路、斜面と墓所などについて印象が書きつけられたのち、以下のような一節でその章は締めくくられている。

そして平原のなか、ふたつの道の交差する場所に、メロンとスイカが巨大な山のように積みあげられていた。深紅色、黄土色、鮮緑色、黄色、赤褐色。いくつかの割れた果実の内部は、ばら色をしていた<sup>(23)</sup>。

色鮮やかな果実は、ギリシアの象徴であろうか。この箇所は、『ロラン・バルトによるロラン・バルト』の「色彩」と題された断章を想起させる。そこでバルトは、「幸せな、甘く、官能的で、喜びにあふれた性のあり方<sup>(24)</sup>」とは、

「絵画の中」、というよりむしろ「色彩の中」に見出される、と語っている。ギリシアがバルトに与える幸福感と甘美な陶酔、そして官能は、このような色彩にみちた光景がもたらしたのだろう。

## 5. ジッドと『地の糧』

若きバルトとギリシアを語るさい、忘れてはならない人物がいる。ギリシア的なフランス作家としてバルトの先達にあたる存在、アンドレ・ジッドである。本稿を終える前に、ジッドについて触れておく必要がある。実は、「文化と悲劇」が発表されたあと、同年に学生サナトリウムの機関紙に掲載されたテキストは、「アンドレ・ジッドとその『日記』についてのノート」というタイトルであった。活字になった二番めのテキストである。ジッドはバルトにとって「作家」の理想像であり、ジッドのようになることを望んでいたバルトは、彼と自分自身とのあいだに多くの共通点を見出していた<sup>(25)</sup>。ギリシアへの傾倒も、そのうちのひとつである。バルトはジッドを次のように評する。

ジッドはといえば、もっとも重要で、もっとも踏みならされた、もっとも往来の多い十字路に誠実にとどまり続けたのである。つまり、西欧におけるふたつの大きな道、ギリシアとキリスト教というふたつの道が通っている十字路である。二種の光と二種の息吹を受け入れることのできる、そうした「完全なる」状況を彼は好んだ。何にも守られることがない、しかし何にも閉ざされることがない、そんな英雄的な状況にあって、彼はありとあらゆる攻撃にさらされ、あらゆる愛に身をささげた<sup>(26)</sup>。

ここで、ふたつの道とは具体的に何をしめすのか。ギリシアの方には異教的な生の歓喜、すなわち少年への肉体的な愛があり、キリスト教の側には、プロテスタントとしての精神的な愛による結婚があると解釈できる。バルトも同じくプロテスタントの家に生まれているが、若いうちに信仰を放棄しているため、その点ジッドとは異なっている。ギリシア的な道のほうこそを、バルトはジッドと真に共有しているといえる。

同じテキストのなかで、バルトはジッドを「ギリシア人」とまでいっている。

ジッドにおけるギリシア文明は、老年のあいだに最盛期に達する。『地の糧』の時代から、彼はどこかヘレニズム的なところをもっていた。ピエール・ルイスが近くにあったのだ。しかし今や彼は本当にギリシア人に、つまり悲劇作家になったのだ<sup>(27)</sup>。

ここで言及されている『地の糧』に注目してみたい。この作品は、官能の経験にみちたアフリカ旅行の最中そして後に書かれ、1897年に刊行された書物である。バルトも愛読していたウェルギリウスの『牧歌』の登場人物が多くあらわれ、「ナタナエル」と呼ばれる人物を中心に、言葉をかわしあい詩句を紡ぐという、風変わりな作品である<sup>(28)</sup>。そして、この作品こそが、果実をめぐる書物なのである。タイトル『地の糧』がすでに果実を含意し、扉には「これらが、我々が地上で糧とした果実だった」というコーランの文言が引かれている。第四の書の三節には、「ざくろのロンド」が歌われ、渴きをいやす果実の甘美さに託して生命の歓喜が朗詠される。ひとしきりざくろが賛美されると、次にイチジクの番がやってくる。「今度はイチジクを歌って、シミ



アース。イチジクの愛は、隠されているのだから。」と促されて、それは始まる。

イチジクを歌います、と彼女は言った。  
 しあわせな愛が隠されている、  
 その花は、内側に折りたたまれています。  
 婚礼が執り行われる閉ざされた寝室のように、  
 いかなる匂いも、外からはわかりません。  
 何ひとつ蒸発することがないので、  
 芳香はすべて果汁と滋味になります。  
 美しさを欠いた花、逸楽の果実。  
 熟した花でしかない果実<sup>(29)</sup>。

漢字で「無花果」と書くことから分かるように、イチジクの花は外からは見えず、隠れている。それゆえ、イチジクに「隠された愛」が歌われる。ジッドの「隠された愛」は何か、もはやいうまでもない。

ここに至って、もう一度「最初のテキスト」に立ち返ってみたい。『『クリトン』の余白に』はどのような作家の影響下に書かれたのかを説明して、バルトは述べていた。「バルザック、デュマ、いくつかの伝記、1925年のマイナーな小説家たちなどが混ぜこぜになったなか、ジッド、ただジッドだけがいたのだ<sup>(30)</sup>」と。だとすれば、ソクラテスを誘惑したイチジクは、ジッド的な「地の糧」であり「隠された愛」の果実でもあったはずだ。最初のテキスト、『クリトン』のパスティーシュのなかのイチジクには、バルトをバルトたらしめた多くの要素が溢れんばかりに詰まっている。プラトン、ニーチェ、

そしてジッド。官能の果実イチジクを、バルトはギリシアを通して発見し、そして味わったのである。

## おわりに

本人が語っているように、イチジクは必ずしもバルトが好んで食する果物ではなかった。好きな果物について、あるときは「洋梨、さくらんぼ、木苺」と述べ、また別のところでは「洋梨、白桃または赤桃」を挙げている。洋梨がもっとも好きだということは確かなようだ。ところで、バルトが一度ならず語っているエピソードに、「ブラッスリー・リュテシアで洋梨を食べているジッドを見かけた」という目撃談がある。バルトがもっとも好きな果物であると考えたとき、この一件がどれほどの衝撃と歓喜をもたらしたかは想像に難くない。憧れの作家が、自分の大好きな果物を食べていたのだから。現実世界でバルトとジッドをつないだ果物は、イチジクではなく洋梨であった。しかし、形状だけを見ると、イチジクと洋梨はどことなく似通ってはいないだろうか。バルトとジッドのあいだで、イチジクは洋梨に置き換えられた。バルトは洋梨を、一番好きな果実を、自身とジッドのあいだの秘密の符丁のように感じていた、と想像してみるのも一興である。

## 註

- (1) Roland Barthes, « Premier texte », 1974, t. IV, p. 497. 以下、バルトからの引用は *Œuvres Complètes*, Seuil, 2002 により、初出年を付記したうえで巻、頁をしめす。
- (2) Tiphaine Samoyault, *Roland Barthes*, Seuil, 2015, p. 103.
- (3) 石川美子『ロラン・バルト』、中央公論新社（中公新書）、2015年、p. 17.
- (4) Samoyault, *op.cit.*, p. 103.

- (5) Barthes, « Premier texte », p. 497.
- (6) *Ibid.*
- (7) *Ibid.*
- (8) *Ibid.*, p. 498.
- (9) *Ibid.*, p. 499-500.
- (10) *Ibid.*, p. 500.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*, p. 500-501.
- (13) バイヨンヌには父方の祖父母の家があり、バルトはそこで子ども時代をすごした。また9歳でパリに引っ越してからも、毎夏訪れていた。
- (14) 原文では *fica* と書かれており、イタリア語である。ラテン語のイチジク *figus* に由来する言葉である。
- (15) Barthes, « Premier texte », p. 497.
- (16) *Ibid.*
- (17) Samoyault, *op.cit.*, p. 96.
- (18) ニーチェ 『ツァラトゥストラはこう言った』上、氷上英廣訳、岩波書店（岩波文庫）、1967年、p. 140.
- (19) Barthes, « En Grèce », 1944, t. I, p. 68.
- (20) *Ibid.*, p. 71.
- (21) *Ibid.*
- (22) *Ibid.*
- (23) *Ibid.*, p. 72-73.
- (24) *Roland Barthes par Roland Barthes*, 1975, t. IV, p. 716.
- (25) 拙稿参照：「『作家』という幻想—ジッドに憧れたロラン・バルト」、『仏語仏文学研究』第49号 塩川徹也先生古希記念特集号、東京大学仏語仏文学研究会、2016年
- (26) Barthes, « Note sur André Gide et son « Journal » », 1942, t. I, p. 39.
- (27) *Ibid.*, p. 40.
- (28) 成谷麻里子 「アンドレ・ジッドの『地の糧』」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊、vol. 52、2007年、p. 107.
- (29) André Gide, *Les Nourritures terrestres*, Gallimard, coll. « folio », 1972, p. 80.
- (30) Barthes, « Premier texte », p. 497.